

やまなし文学賞 青少年部門 佳作

栓

クサレトマト

作

栓を抜く夢を見た。

彼が目を覚ましたのは、鳥が鳴いたからでも、朝日が差し込んだからでもなかった。無機質な水の塊があごを叩く、その不快に耐えられなかったからだ。一度二度頭を振って、彼はゆっくりと目を開けた。

眠気の残る脳を起こすように伸びを一つして、彼は立ち上がる。彼の体の上から押しつけられた水が、本棚の足に八つ当たりしている。寝間着に染み込んだ水は彼の足目がけて落ち、くるぶしに届かない高さで水面に当たって波紋に変わった。

眠気に身を任せそれを眺めていた彼が、思い出したように腰を折る。おもむろに、彼はその足元の水を手ではね上げた。

顔に散った飛沫を洗顔の代わりとして、彼は完全に目を覚ました。

体に張り付く濡れた寝間着を洗濯かごに投げ込んで、まだ乾ききらない制服に着替える。通学用の鞆かばんを手にとって、彼は階下へと水をかき分けていく。

もはや機能していない階段を泳いで下りれば目の前が玄関である。階段横のリビングに一瞬目をやって、朝食を食べる余裕はないことを思い出す。

無秩序に浮かんでいる靴から自分のものを見繕う。体をドアとノブに押し付ける。

体全体を使うように、水に押された玄関ドアを開けて、彼は通学路へ一歩踏み出した。

いつも通り視界の半分を埋める水と全く無関係といった顔で立っている家々を眺めながら、ため息をひとつ吐く。

彼の人生には、常に水があった。

水かさによつてはつま先立ちを強要されるほどの水量が、少なくとも彼の世界には常に満ちている。それが彼にとって邪魔でなかった日はない。鏡がわりに水面をのぞき込む。いつも通り頬に水をはたいて、彼は高校へ歩き出した。

水をかき分けて進む。水をかき分けて進む。朝の彼は、大抵それだけを考えて歩く。水をかき分けて進む。高校へと続く坂道に差し掛かる。水をかき分けて、進む。かき分けて……彼の思考が中断される。

背後から大きな音が近づいてくる。それがただの音でなく自分と呼ぶ声であることに、彼はようやく気がついた。彼の数少ない友人が彼をみとめてやってきたのである。

「おーす」

「おーい？」

「おーい、そんなにぼんやりしていると轢かれるぞ」

目を伏せながら彼は振り返る。にこやかに笑いかけている、であろう友人の首には、いつも通り魚の頭が乗っていた。

「ああ、悪い」彼は意にも介さないふりをしながら、あごの下まで迫る水を震わせて声を出す。

「ところで、お前また夜更かしでもしたの？ 隈^{くま}できてる」水面に目を凝らして、彼は問う。

「ああ、学祭の準備に結構かかっちゃって。ありやまだかかるかな。そっちは？」

友人を映した水面が揺れた。同じ種族とは思えない流線形の頭を映す水に、目を凝らし続ける彼に、友人が笑うように口を開ける。

「その調子じゃ駄目そうだ。ま、当日には間に合うといいな」

それらしいことを言うだけ言っただけから泡を出している友人をよそに、彼は昨日の学祭準備のことを思い出していた。

現れない一部の運動部、やることがないからと喋^{しゃべ}り、スマホをいじるだけの帰宅部、そして自分をなじる責任感の強い女子の声。なにより、その惨状のすべてが自分のせいであることに、彼はひどく狼狽^{ろうばい}していた。彼が、本来なら一番にそれらを諫^{いさ}め、舵^{かじ}を取るべき準備委員であったからだ。

手順書くらいは作ってこいと彼に言ったクラスメイトの、感情の一つも窺^{うかが}えない目を思い出して、彼の呼吸が速くなる。

水のせいだ、と彼は言った。なにしろ、この水だ。せつかく足にしか水の当たらない自室でくらい、学校のことなど考えなくなかったのだ。

水さえなければ、と彼は言った。もう少し余裕があれば、それくらいは。彼の胃が、入れでもない内容物を逆流しようとしていた。

えずいて下を向いた喉に空気が入ってこないことによりやきやきが付いた彼が、大慌てで水面に顔を出すと、彼の足は高校へと向かう坂道を下り終えたところだった。

彼の後ろにいたはずの友人はいつの間に校門を越えていた。彼も、胃に入りたいくらいかの水が腹を揺らす感覚に耐えながら校門をくぐる。

濁った水が鼻先をかすめた。

靴箱に靴を預け、廊下を進み、錆びついた教室の戸を開く。生臭いにおいが鼻をつく。

数人で一つの机に集まり喋るクラスメイト、隅の机に突っ伏しているクラスメイト、課題であろう紙に何か書きつけるクラスメイト。そのどれもが、感情の浮かばない目と、泡を出し続けるえらを側面につけた、流線形の頭をしている。

そんな当たり前の光景を、当たり前に水が呑みこんでいる。

疑問には思わない。当たり前の水の中で、当たり前のように息ができない自分に、どこかで誤ったのだろう自分にまた一つ落胆するだけだ。

かつては、疑問に思っていたこともあった。自分と他人とは何が違うのかと、濡れた枕に問うたこともある。思い切って友人に聞こうとしたことも一度や二度ではない。

けれど、あまりにも当たり前に魚の頭で、あまりにも当たり前に息をする彼らに、彼は何も言えなかった。人間でないと排斥されたくはなかった。

自分の机に靴を投げる。席に着く。どうにか息をするために鼻を水から出す。すると、自動的に天井を向くような格好になる。何をするでもなく、彼はその体勢で数分じっとしていた。

首が疲れて、ふと席を立つ。首を回して増えた視界のさらに端に、ひとすじ何かが見えた気がして、彼は窓の方に振り向いた。

もつとよく見ようと窓に近づいた彼を、チャイムが制止する。大きく息を吸って、どうにか彼は席に座り直した。

朝のホームルームは簡素なものだった。今週の日程の確認と、連絡事項がいくつか。しかし、そのひとつさえ彼には届いていない。彼は、さっきの視界の端の何かに興味をそそられていた。

興味、というより願いのようなものですらあったのかもしれない。彼の人生を変えられるかもしれない鍵を、彼はそれに見出していた。

彼はその日一日、暇さえあれば窓の先を眺めた。本校舎三階からの眺めも半分近くが水に覆われていたが、この時ばかりは彼には水はどうだってよかった。どうだってよくなるために、なにかを探して窓を眺めた。

休み時間になるたびに、窓を開けて下の景色をのぞき込む。手を伸ばしてみる。

授業中にまで、彼は窓を眺めていた。教師に怒られることはない。諦められているのだ、

と彼は考えていた。息をするのさえ手いっぱいな状況で授業など聞けるはずもない。彼も、同じように諦めていた。

いつの間にか最後の授業が終わって、彼は帰路につく。教室の窓から見える学校の裏手に行ってもみたが、野球部だか吹奏楽部だかが走っているだけだった。

彼も部活には入っていたが、休んでも何も言われないことに気が付いてからは一度も出ていない。今更出て行っても白い目で見られることを彼はわかっていった。

そういえば通学路で話したあの友人は部活で仲良くなったのだったか、と思い出した拍子に、部活が始まったばかりのころ顧問に言われた言葉が浮かんた。「高校でできた友人は一生の友達になる」だっただろうか。

二年で一人しかできなかったな、と自嘲した彼の真横から、車が押しのけたらしい波の塊がぶつかってくる。

顔をしかめた彼の視界の端に、再び何かが映る。瞬時に彼が目線を向ける。目線の先には、水と沈んだ車が見えた。その姿はない。

やりきれなくて地団太を踏んだ彼の足先が、水圧に負けてとす、と地面に落ちた。

長い坂を上れば彼の家が見える。胸を叩く波に苛立ちながら、家のドアを開ける。適当に靴を脱ぎ散らし、階段を上る。

自室に入った彼は、制服のまま布団に倒れこんだ。

これがいつもの彼のルーティンである。そうして数時間眠り、目覚めると夕食を食べ、風呂に入り、どうにか制服が乾かないか四苦八苦して、携帯ゲーム機の電源を付ける。

彼にとって夜は、水に侵されない唯一の時間であり、自室は、水に濡れない唯一の場所なのだ。だから、最近自室にまで水が上がってきているのには辟易していた。

今日もそうしてゲーム機の電源を入れようとして、彼は考えなくなかったことを思い出す。明日は学祭の準備がある日である。

逡巡の末、彼はゲーム機を閉じて靴を取り出した。大まかな手順くらいは考えなければ、とノートを切り取る。向う脛まで濡らす水に腹が立って、一瞬遅れて恐ろしいことに気が付く。急いで部屋の本棚に駆け寄る。

彼の恐ろしい予想の通り、一番下の段が半分水に浸かっていた。崩れ落ちかける足をどうにか立たせて、彼は一番左に差さっている小説を引き出す。ぐちゃ、という音とともに彼の

手に収まった本は、水を吸ってとても読めるような状態ではなくなっていた。

ぷつりと何かの切れる音がした。あるいは、ぼきりと何かの折れる音がした。

特に彼にとって思い入れの深い本だったわけではない。誰かの形見だとか、作者直筆のサインがあるだとか、そんなたいそうなものではない。けれど、ふと一年に一度ほどの頻度で読み返す、そんな本だった。

きっと、普通に生きていれば、人生のトラウマになるような出来事じゃない。けれど、彼は限界だった。その一滴が、表面張力でもついていた彼の器からすべてをあふれさせてしまうほどには。

彼は鳴咽おえうした。大声で泣きたいような、そんな気分だった。けれど、彼の涙腺はそれを許可しない。その出来事自体は大きなものではないからだ。こんな時でさえ涙を出すのを洩る自分に辟易した。

せめて叫びだしてしまいたかった。けれど、彼の喉はそれを許可しない。家族が眠っている時間だからだ。こんな瞬間でなお家族の心配をしてしまう自分が憎かった。

出力された彼の行動は静かなものだった。耐えきれないように数滴涙をこぼし、押し殺した息と声をいくつか吐いた。

涙で少し水嵩みずかさが増えた気さえて、彼は腫れた瞼まぶたを擦りながら顔を上げる。その視界の端の端に、三度何かが映った。

咄嗟とっさに、見逃すまいと彼は目を動かす。果たしてそれはあつさりと彼の目に映る。

それは縄だった。麻縄の片端が、部屋の隅に転がっている。それがなんだか妙に美しく見えて、彼は縄の先を目で追った。

部屋を横切って部屋の窓に続いているらしいそれを追えば、少し開いた窓の先に、ピンと張った縄が延びている。

彼の瞳には、感動と安堵あんどの色が浮かんでいた。彼は、きっと自分はこれを待っていたのだとさえ考えた。

ふと彼が窓を開ける。

数瞬ののち、彼は縄を握って窓枠を飛び出していた。

投げ出した彼の体を支えるのは握った縄だけで、それがなんだか彼には清々すがすがしかった。

夜風が彼の顔にあたる。ぐしよぐしよの寝間着が、その風ひとつで乾いてしまう気がした。眼下に小さく、坂の下の高校が見える。なぜあんなに小さなことをずっと考えていたのか、

今の彼にはわからないほどに彼は幸せだった。

いっそのまま縄につかまって、ターザンのようにどこかへ飛んでいきたくなった。

しかし、彼の期待と裏腹に、ぽんという腑抜けた音と共に縄から抵抗が消える。それと同時に、彼の体はどこかに強く引つ張られた。

数秒経ってやっと、水が抜けていつているのだと彼は気が付いた。縄が張られていたはずの夜空のその先に、渦を巻く黒々とした穴が見える。

事ここに至って、やっと彼は栓を抜くことが悪であったことを悟った。

忘れてはならないことを、どうにもならない瞬間に思い出した震え。

鞆をまさぐった手に、それらしい感触が伝わってこない冷や汗。

無意味に回転した脳が状況への答えを出す前に、彼は思考ごとその渦に飲み込まれた。

その先は無であった。天国であるとか地獄とか、そんなものはない。

今しがた自分が落ちてきた方を向けば、その一点だけがまだ光を映している。一縷の望みをかけて、彼はそこへ行こうと手を振った。

しかし、もがいた手は空を切る。ここには水がない。かき分けることしか知らない手は、とうに水以外の歩き方を忘れていた。腕を振り回す彼は、努力虚しく栓のさらに底へと吸い込まれてゆく。

栓を抜く夢を見た。

私が目を覚ましたのは、鳥が鳴いたからでも、朝日が差し込んだからでもなかった。無機質な音が耳を叩く、その不快に耐えられなかったからだ。アラームを無理にでも消そうと、私はスマートフォンに手を伸ばした。

スマホをつかみかけた手に、ひたと冷たいものが当たる。私は手を振って慌てて引っ込めた。寝間着で拭こうとした手が濡れていないことに気が付いて、小さく舌打ちする。

ようやく、私は頭を引きずるように起き上がった。

汗のにじんだ寝間着を洗濯機に放って、生乾きのTシャツに袖を通す。文庫本とノートパソコンだけ鞆につめて、私は部屋のドアを開けた。

未だ、私の前に栓が現れたことはない。ただ、成績の通知を見た夜や就職の話がされた日、栓の影を見る度に、私は彼のように鼻先に水がかすめたような心地がするのだ。

水は消えても、息苦しさは消えやしない。